

平成23年 5 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21720054

研究課題名(和文) 中華民国期上海における地方劇の進出と定着に関する研究

研究課題名(英文) Study of the Local Dramas' Ingress to Shanghai in Republican China

研究代表者

森平 崇文 (MORIDAIRA TAKAFUMI)

早稲田大学・演劇博物館・研究員

研究者番号：30468847

研究成果の概要(和文)：

2年の研究期間中に、論文の発表が2件、国際シンポジウムや学会における研究発表が3件であった。これらは何れも本研究の主たる対象である中華民国期の蘇劇と甬劇を直接扱ったものではなかったが、中華民国期及び中華人民共和国期の上海における地方劇や芸能を対象とするもので、そこで用いた資料の多くが本研究の遂行に当たり収集・調査したものである。この2年間で中華民国期上海の地方劇の公演状況及びそれと都市文化との関係に関する研究の重要性を強く認識することができた。

研究成果の概要(英文)：

During two years, I published two papers and presented in the international symposium and the domestic workshop three times. Though these papers and presentations were not concerned with the main theme of this Grant - in - Aid for Scientific Research directly, but were concerned with the local dramas and show business in Shanghai between the Republican China and the People's Republican China, which almost accorded with the theme of this Grant - in - Aid for Scientific Research. Through this study, I gathered many kinds of materials and realized the importance studying the relation between the local dramas and the urban culture in Republican Shanghai again.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 平成21年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 平成22年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,000,000 | 600,000 | 2,600,000 |

研究分野：中国演劇史

科研費の分科・細目：芸術学・芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：上海、中華民国、中国演劇、地方劇、都市文化

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、中華民国期に誕生した上海土着の芸能である「独脚戯」と「滑稽戯」の成立と発展の歴史的背景を明らかにし、それを通じて中華民国期上海の都市文化の一側面を考察することをテーマとする博士論文を作成中であった。

そこで、上海土着の芸能である独脚戯と滑稽戯の芸能的特徴や誕生の歴史的背景、及びその上海都市文化へ与えた影響等をより複合的に考察するためにも、これらとほぼ同時期の上海興行界において一定の市場と人気を有していた、上海土着ではない、中国各地の地方劇に代表される外来の芸能の上海への進出の過程と、それらを受け入れた上海都市文化の特質に対して強い関心を抱くようになった。

但しその段階において、上海における地方劇の進出と定着の過程を対象とした研究成果は、現在まで上海に存続する地方劇である越劇と淮劇に限定おり、その他の地方劇に関しては進出・撤退のおおよその時期、そして代表的劇団・俳優及び演目に関する情報が手に入るだけであった。つまり中国を含む先行研究の状況としては、中華民国期において一定の市場と人気を有しながら、中華人民共和国成立前後に上海から撤退ないし消滅していった地方劇に関しては、国内外において参照すべき研究成果が乏しい、ということであった。

ただ一方で、そのような研究状況は上海から撤退・消滅した地方劇の、上海への進出・定着・撤退・消滅の過程を明らかにすることを通じ、これまでの20世紀上海演劇史を書き換えられうる可能性が大いに存在することも意味している。また、中国国内の各図書館に収蔵されている中華民国期の新聞・雑誌のマイクロフィルムが比較的容易に購入できるなど研究環境においても大きな改善が見られる状況となり、大量の資料調査と収集が必要となる本研究課題に関しても一定の研究成果が出せると判断した。

2. 研究の目的

20世紀上海演劇に関しては中国を中心にして、現在の上海において存続している各劇の歴史を中心とした通史が確立されて現在に至っている。その結果、中華民国期に上海に進出し、上海興行界において一定の市場と人気を有して上海都市文化の一角を形成しながらも、その後市場や人気を失う、または演劇改革や文化大革命といった中華人民共

和国成立以降の政治的な要因などによって、上海から撤退或いは消滅してしまった地方劇に関しては、その上海進出・定着・撤退・消滅の過程や背景など基本的な情報が不明なままとなっている。

本研究は中華民国期に上海に進出し、その後20世紀中期までに上海から撤退・消滅していった幾つかの地方劇を対象に取り上げ、それらの上海進出・定着・撤退・消滅の過程と背景を、当時上海で大量に刊行されていたにもかかわらず発行期間が短い、或いは商業的・娯楽的要素が強い、保存の状況が悪く散逸しているものが多い、などの理由で一次資料としてこれまで重要視されてこなかった「小報」(タブロイド版新聞)や上海市の公文書資料といった、これまでの都市文化研究では十分活用されてこなかった一次資料を大量に用いて明らかにすることを主たる課題とする。用いる資料の側面からも本研究はこれまでの上海芸能史・都市文化史研究に比べ画期的であると言える。

そして本研究を通じ、上海から撤退・消滅していった地方劇の視点から20世紀上海演劇史を再構成し、更には対象とする地方劇を受け入れた上海興行界の特徴、各地方劇の進出と定着を支えた都市のエスニシティや都市文化の特質を考察することを目指している。つまり本研究は新しい一次資料と視点を用いることによって20世紀上海演劇史を再構成し、それを通じて都市文化研究・地域研究の領域まで考察の対象とすることを企図するものなのである。本研究の様な芸能の歴史を通じて上海の都市文化を考察する研究は現在においてあまり見られない。その点において本研究を遂行する積極的意義が存在すると考えている。

3. 研究の方法

本研究では中華民国期上海に進出・定着し、その後上海から撤退・消滅した地方劇の中でも特に、中華民国期とほぼ重なる20世紀初頭に上海に進出し、中華人民共和国成立間もない20世紀中期に相前後して撤退していった、江蘇省蘇州を起源とする蘇劇と、浙江省寧波を起源とする甬劇の、2つの地方劇を中心に取り上げることとする。

蘇劇と甬劇を本研究の主たる対象に選んだのは、両劇の進出・定着・撤退の時期が何れも本研究が対象とする20世紀初頭から20世紀中期に一致する、また一時期とはいえ上海の興行界において現存する各劇と同程度の市場と人気を有しており、とりわけ蘇劇に関しては1920年代まで上海芸能界においても上位に位置する規模と人気を有してレコ

ードやラジオなどの新興メディアに参入していった、そして更に両劇の起源である江蘇省蘇州と浙江省寧波出身者は20世紀上海の各階層・業界においてその人数で多数を占めまた指導的立場を確立しており、芸能とそれを支えるエスニシティの関係を考察する上でも重要性が高い、そして両劇とも上海近郊に属しているため、劇団等演劇関係者の上海と出身地との往来が盛んで進出や撤退の過程を考察しやすい、といった理由によるものである。

具体的研究方法として、蘇劇と甬劇の上海への進出・定着・撤退の過程、及び上海における公演状況や評価等、更に出身地である蘇州と寧波と上海との劇団や俳優の往来や各地における評価の比較などを、当時上海と蘇州や寧波で刊行されていた代表的新聞や雑誌に収録の関連記事や公演情報を調査・収集することを通じて明らかにするものである。両劇の起源である江蘇省蘇州と浙江省寧波には何れも中華民国期の数十年間において発行を継続してきた新聞があり、それらの一次資料を活用することで上海における状況との比較がより明確になると考えている。

中華民国期上海を代表する『申報』と『時報』に関しては所属先の早稲田大学に復刻版が収蔵されている。それ以外の資料に関しては、本研究で用いる新聞・雑誌の多くが上海市図書館に収蔵されており、上海へ出張して同図書館に収蔵されている資料の閲覧・収集を行う必要がある。また一部の新聞や雑誌に関してはマイクロフィルム化され販売され日本からでも購入可能であるため、これらの中でも本研究の遂行に当たって特に資料的に重要度の高い幾つかを購入する。そしてそれによって、上海出張期間を除く日本国内においても資料の調査・収集等の研究活動が推進できると考える。

4. 研究成果

2年間で査読付きの学術論文が2件、海外における国際シンポジウムでの発表が2件、国内における学会発表が1件という成果を収めることができた。本研究開始以前に比べ、年度内の研究成果は格段に増加しており、本研究が採用され遂行できたことに伴う成果上の意義は大きいものと考えている。

但し残念ながら、これらの研究成果は何れも当初主要研究対象としていた蘇劇及び甬劇を直接対象とするものではない。両劇の上海への進出・定着・撤退に関しては現在資料の収集・調査が終了した段階であり、それに関する研究成果は採用期間が終了した今年度より漸次公表していく予定である。

では本研究採用期間に発表された研究成果が本研究の課題と全く無関係かということではない。むしろ対象となった芸能のジャンル及び対象とする時期に若干異同が生じているに過ぎず、20世紀上海における芸能の進出・定着・撤退の過程と背景、及びそれらと上海都市文化との関係や上海都市文化の特徴を考察するという基本テーマに関しては、本研究採用期間中に公表された研究成果に何れも共通するものである。またこれら研究成果は本研究課題に関する資料を収集・調査する過程で得られた資料に多くを負っており、その点でも本研究における成果の一つであるとみなすことができる。

本研究採用期間中の研究成果として具体的には、中華民国期1940年代の上海における評劇と越劇の2つの地方劇と新聞業界との関係を論じたもの〔学会発表〕2)、中華民国期に上海で誕生した、日本の新派劇に相当する文明戯の、中華人民共和国期の1960年代上海興行界における消滅を考察したもの〔雑誌論文〕1)など、上海における地方劇の進出や撤退をテーマとする研究成果を発表することができた。前者に関しては中華民国期上海で多数刊行されていた「小報」(タブロイド版新聞)を、後者に関しては上海市に所蔵されている公文書を多数活用している。

更に上海を代表する地方劇である越劇の、中華人民共和国期1960年代における北京への進出とその後の上海への撤退に関する論考を発表した〔雑誌論文〕2と〔学会発表〕3)。現在中国国内の都市史研究においても1950年代から1960年代の都市文化研究に対する関心が強まりつつあり、本研究を国際シンポジウムにて発表した際、シンポジウムの最終討論の場に置いて参加者から特に本研究の意義について言及された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

- 1、森平崇文、「「通俗話劇」以降の文明戯—1950年代上海を中心に」、『演劇映像学2010』(早稲田大学演劇博物館グローバルCOE)、査読有、第2集、2011年3月、87-111頁
- 2、森平崇文、「北京越劇団の建団と撤退(1960-1961)」、『演劇映像学2009』(早稲田大学演劇博物館グローバルCOE)、査読有、第2集、67-85頁

〔学会発表〕（計 3件）

- 1、森平崇文、「雑技の社会主義的改造—中国雑技団を中心に」、表象文化論学会第5回研究発表集会、2010年11月13日、東京大学
- 2、森平崇文、「孤島、淪陥時期上海的小報與戯曲」（孤島、淪陥時期の上海における「小報」）、「小報文化與中国都市性」国際ワークショップ（「小報文化と都市性」ワークショップ）、2010年8月27日、中央研究院近代史研究所・台湾
- 3、森平崇文、「北京越劇団的建団和回滬」（北京越劇団の建団と上海への撤退）、第三屆「現代城市文化史」国際研討会（第3回「現代都市文化史」国際シンポジウム）、2009年7月5日、華中新範大学歴史系・中国

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森平 崇文 (MORIDAIRA TAKAFUMI)

早稲田大学・演劇博物館・研究員

研究者番号：30468847